

デデポッポ

Vol.11

京都市動物園
野生鳥獣救護センター通信
平成22年1月6日発行

てんてこまいの救護センター

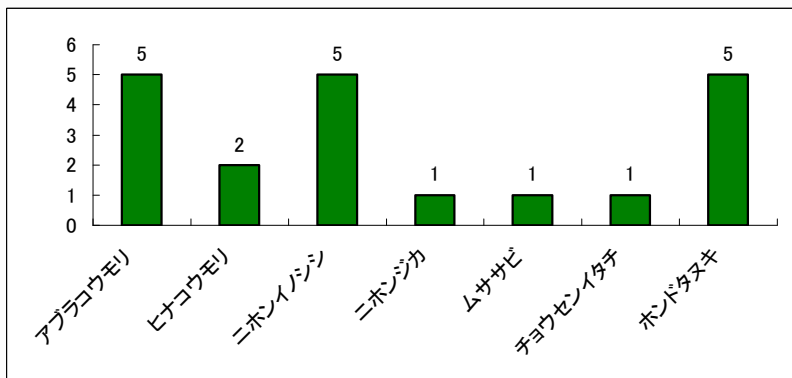
今年の夏はあっという間に過ぎ、もうすっかり冬ですね。

今年の夏、救護センターは昨年の倍近くの哺乳類の赤ちゃんが、救護されてきました。一度にたくさんの赤ちゃんが運び込まれて、スタッフも獣医もてんてこまい！とても大変な夏でした。

今回は哺乳類の赤ちゃんの人工保育について、紹介したいと思います。



今年救護された哺乳類の幼獣数



救護センターでは哺乳類の赤ちゃんには、主にドッグミルクを与えています。赤ちゃんの胃は小さく、一度にたくさん飲めないため、一日に4~5回、コウモリなら6回を1時間半から2時間おきにミルクを与えます。

赤ちゃんと言えど野生動物。最初は警戒してミルクを飲んでくれません。時にはうまくミルクを飲まず死んでしまうことも…素直に飲むようになるまでが、その子の生死の分かれ目になります。

去年は11頭だったのが、今年はなんと20頭も運び込まれてきました。一番大変だった時期では、アブラコウモリ2頭・ヒナコウモリ2頭・イノシシ5頭・ムササビ1頭・タヌキ3頭のミルクを、一度に与えなければなりませんでした。



運び込まれる原因は、衰弱、交通事故の他に、親が子を溝や茂みに隠し餌を取りに行っている間に、人間が親とはぐれたと思って保護（誘拐）してしまう誤認救護も多いです。こうしてセンターで大きく育った子どもたちは、食べ物と比較的多い時期に野生へ戻します。

しかし人が育ててしまうと、その動物は人間を恐らなくなってしまう。人を恐らない彼らは、野生に戻してから山から下りてきたり、人に簡単に近寄り畑を荒らす害獣になってしまう可能性がありとても難しい問題です。

ということで、哺乳類の子どもを見つけても、ケガをしていなければ安易に手を出さず、その場を立ち去るように心掛けて下さい。

